

岡山・広島・岩国

俳句倶楽部

令和八年四月作品集

春 知佳子

春が好きです。枯木のように見える木に花が咲くと、まるで夜が明けて朝が来るように、何があっても、自然に身を委ねていけば、時が解決してくれると感ずるのです。いつも歩く土手にムスカリが咲き、鳥が来る。毎年その繰り返しに深い喜びを覚えます。別れの寂しさもある季節ですが、新しい日々を期待し、前向きになれる時でもあります。

春来る車椅子止め川に向く
猫柳に光る雨滴を弾きけり
登るほど広がり見ゆる春の海
梅の花だらうか色付くあの辺り
どこからか梅の香の濃く雨の朝
紅梅の下にて友と話しをり
人声のする方に行く梅見かな
子の列の渡り終へたり春の風
旅人と譲り合ふ道花馬酔木
初花を探し坂道迷うたり

《作品鑑賞》

ちどり

私も春が好きです。私の身近な所で家や実家の周りにも、あちこちに春を感じます。新しい生命をいとおしく思います。

春来る車椅子止め川に向く

猫柳に光る雨滴を弾きけり

春立つ日、車椅子のお母様が誰かとお出かけされ、二人で川に向き合っておられるのでしょうか。雨上り、猫柳に光る雨滴が知佳子さんの指に弾かれて、とてもきれいです。

登るほど広がり見ゆる春の海

どこからか梅の香の濃く雨の朝

小高い丘か山を登れば登るほど、春の海が広がって見えま

す。雨の朝、どこからか梅の香りが強く漂ってきます。

四句とも、知佳子さんのそばにいて私も春を楽しんでいます。

初花を探し坂道迷うたり

今度は、初花を探して道を迷っています。迷いもまた、心地いいです。

佐保光俊

昼からは雨盛んなる初桜
川分かれまた川分かれ桜咲く

大畑恵

咲き初めし花に退く日を思ふ
夫と来てさくらさくらの山の里

ちどり

帰りには里の桜の開きたる
故郷の枝垂桜の見事なり

高尾ひとみ

登りたし桜見てゆく山ならば
思ふさま枝を広げよ里桜

暁子

乳母車に赤子の眠る花の下
山寺の読経のつづき花の雨

辻純江

まだ硬き蕾の桜見てまはる
雨上るやちむん通りの桜かな

亜矢

次々と人上り来る花の山
校庭の灯に照らさるる桜かな

すみれ

窓に見る桜は小雨受けてをり
雨あがり桜吹雪を身に浴ぶる

雲雀

抜け出でし花のトンネルまた戻る
花を背に友と一緒に写真撮る

綾乃

仕事終へ急ぐ川辺よ花万朶
蒼天を舞ふ花卉の真白さよ

竹田千紘

花の雲レジャーシートを籠に入れ
友達と写真撮り合う花盛り

裕子

花卉の落ちて小さき水輪かな
留まるも流るるものも花筏

井藤希

人気なき寺町通り初桜
瀬野川の二三分咲きの花見かな

知佳子

花の塵巻き上げて鳥飛び立てり
花吹雪赤子ぐつつすり寝りをり

村上正人

つむじ風花屑巻いて去りゆけり
散る花で小鳥の骸埋めやれり

森口良樹

薄目せる耳にテレビの花だより
川沿ひの散歩の頬に花の風

上條忠

風吹いて櫻花待つ昼下り

志路猿

枝垂るるを花咲き上る千朶かな

秋楡

指差して数ふるほどの初桜

河原静子

高速のバスから見ゆる桜かな

高嶋絹代

入口に河津桜の飾られて

今井淳子

乗客の肩越しに見る桜かな

熊谷ゆり子

石垣に大火の跡や花の城

高梨英子

桜散る友の最期の手を離し

大原良子

朝桜いつもの道を大回り

桑門わかこ

坊守の今日も落花を掃いてをり

民

ひとまはりふたまはりして花の数

上島康子

道すがら橋から見たる花筏

桜湯

車窓には川辺の桜七分咲き

土肥律子

友を待ち硝子越しなる桜かな

なつ

足早に花へと向かふ人の波

美耶

五分咲きの桜に覗く青き空

撫子

川面へと伸びる枝先花二輪

やす保

夜桜の造幣局を巡りけり

古川廣子

水面より風吹き上げて花吹雪

山野ウタ

幾度も花屑集め通学児

前田範子

一足す一二人の暮らし桜咲く

弥生

桜咲く寺の階段人集ふ

みさ子

幼子の指差す先の花筏

和田史子

あな嬉し桜の花びら舞ひ込みぬ

春の雪昨日の足跡覆ひけり

我が頬をかすめ花へと蝶々かな

手を振れば口元緩む受験生

三人の会話のつづく斑雪かな

蝶々かな離れてはすぐ纏れ合ひ

芽吹山上り高層ビルを見る

残雪の稜線に聞く鴉かな

蝶々かな畑の百花を飛びまはり

春の雨止んで近くの山へ行く

残雪の山終へて見る夕日かな

鷹化して鳩は川辺にででぽぽと

春寒の木立の鴉鳴き合へり

露の臺ただだ探す無言かな

けふひと日荅を濡らす春の雨

シヨベルカー下つてゆける春の山

生まれたる蠅大池を飛びにけり

鳥の声高きに聞いて桜かな

鴉の巣ビル建設の音しきり

囀の右と左で違ひけり

花の雨やんで雲間の月明り

春風や楽譜を買ひに街へ行き

春蘭を過ぎてほどなく山の神

信号を待つ間に散れる桜かな

新しき楽譜をめくる春日かな

古墳見て出雲に踏みぬ春の草

野に在れば野の花となり風信子

春浅し川にくつきりビル映る

うららかや出雲の笑ひの中に居て

四十雀と小声で人に教へけり

薔薇の芽に立ち止まりたるホテル前

佐保光俊

高尾ひとみ

亜矢

初音聞く出湯に母と並びゐて

春光の出湯とほくに父の声

煉切にさくら桜と歌ひけり

水切りの波紋は花の宮島へ

釣り上げてつぶらな眼なり桜鯛

いもうとは紅椿吾は白椿

ほたほたと椿の落つる煙雨かな

誰よりも母が浮かれて春の旅

雌滝より雄滝へ向かふ昂りよ

望みたる雄滝眺むる父の背よ

綾乃

うららかや弁天島の鐘を聞き

判子屋の残る町並つばくらめ

裏店の対の雛のいとほしき

雛の間の柱時計の遅れがち

子ら居れば雛の顔の和らぎて

雪柳揺れて小道に囁くか

沈丁の咲けば一途に匂ひたる

この辺で休んでいくか花ミモザ

囀の岨道不意に行き止まり

薬湯に浸かりし後の春の風

井藤希

ベランダで手を止めて聞く初音かな

土佐水木故郷の山に咲きし頃

高速道前も後ろも山笑ふ

落つる花咲く花のあり紅椿

芝居果て家路に見上ぐ朧月

沈下橋流れに浴へる桜かな

そよ風の枝垂桜の下に居り

夜桜を見に行こうかと子を誘い

東京へ帰る息子と花見かな

山桜峠を越えて訪ねけり

大畑恵

野の宮に今朝も箒目藪椿

池の端の山吹始終ゆれてをり

坪庭の苔に落花のひとしきり

山寺の小雨に煙り竹の秋

雀の子藪の低きに騒ぎをり

鶯や川は曲りて本流へ

花種の貰ひをりしをけふ時けり

伊予柑むく庭にほどよき雨の降り

夕風の心地よきかな胡瓜植う

城の春惜しむ天守は解体と

暁子

靴底を張り替へ夫は春山へ

頭上高く重たさうなる杉の花

落の臺天ぷらにして妹来

はくれんの庭の主に声をかけ

我が庭の木蔭の実には百千鳥

畑の屑燃やしてやおら畑を打つ

彼岸講耳に手を当て夫は聴く

残る鴨吾子の遊びしこの浜辺

母が家で姉妹は御八つ桃の花

大樹となり山荘覆ふ山桜

すみれ

パトカーの丸みに朝日春浅し

春めいて古墳の形の田んぼかな

春めいて日本最古の石器かな

うららかや礎石の上に座りたり

フェリーより島をゆびさし風光る

おそろいのマグカップ買いつばくらめ

前髪の寝ぐせを直す春の朝

春の宵空席多き映画館

とりどりの車並びて春深し

恐竜の牙の形や望の月

竹田千紘

雪柳激しき風の通り道

菜の花の真ん中の道帰りけり

梅の香や戯れに弓引いて

やすやすと庭に入る蝶また戻り

幼子の追ひ駆くる蝶消えにけり

海峡の海の暗さや春の旅

音立てて行く手に転ぶ春落葉

幼子の放したる蝶どこへ行く

饅頭に土筆の焼印旅の春

石鹼玉声のだんだん近づきて

幼子のなづな摘みては花束に

白薊漫ろ歩きの風の道

春の野に転がるボール蹴り損ね

幼子の雉に向かひて走り出す

白薊もう一度見て楽しみぬ

眠る子を抱へ橋行く春の風

幼子と土手でかけつこ鼓草

滑走路に向かふ機体や山笑ふ

春深し餌を食む鴉見てゐたり

幼子に飾兜をかぶせたり

金網で隔つる基地や仏桑花

春闌る置きつばなしの子のじようろ

里へ行く道あちこちに桜咲く

潮風やバナナ畑を右にして

花冷えや迷ひし道は坂となり

花の下姫二人でお喋りす

足跡に海星乾いて春の浜

ゆつくりとされよと去りし桜守

花種を蒔いて毎朝見に行きぬ

月蝕の進む春月雲の閑

知佳子

ちどり

辻純江

春の朝膨らむ蕾にふれてみる

快晴の春潮飛び交うフランス語

庭の木の芽吹く早さのそれぞれよ

空からの父の声かと雲雀鳴く

春の潮鳥居の砂へ小刻みに

葦の角向う岸より見てをりぬ

この急な坂の向うで花見とす

神鹿の背中に揺れる藤の影

茎立の大根おなじ背丈なる

夕暮の窄んだ花を好みけり

穴子飯リュックに担ぎ神体山

山肌に桃満開の備前かな

杖をつく兄とゆつくり桜土手

奥山の双子の鹿が動く時

百本の桃の咲きたる休耕田

散る花をハンカチ広げ受けてをり

春の旅巨石をくぐる巨人かな

地下街を出れば大きく春の空

咲くミモザ新聞紙面をも飾り

現れし干潟働くシヨベルカー

春の雲ひとつひとつに名をつけて

裏山に時を忘れて蕨狩

先輩と後輩並ぶ牡蠣屋台

春の昼コインランドリーに微睡んで

潮干狩空の青さを背に受けて

青楓星の数ほど重なりぬ

下ろしたての靴で春霖歩きをり

潮干狩いつしか蟹を追うてをり

ひらひらとあの上枝に若葉風

春愁や久しく会はぬ友のこと

雲雀

ふじ女

松田裕子

鳩の湖波に漂ふ花筏

鶯の鳴き競ひたる散歩道

山茶花の散りたるままに里の家

麗かや回り道する河川敷

分校に懸かる夕日や山桜

水鳥やV字を残し水の上

雨粒を払うて牡丹母に見せ

遊漁船の向かふ漁場の朝霞

石ひとつ乗せて真綿の白さかな

雨止みて春三日月の夕となり

磯へ出る山道険し花通草

奥付をじつと見てゐる春炬燵

山椒の芽摘みし吾が手の匂ひ好き

背伸びしてまた縮こまる朝寝かな

毛鉤巻く指先見つめ春灯

主逝く庭に鶯鳴きにけり

その中に赤札のあり植木市

紅梅や琴の音する文庫館

逝きし人想ひ苺を噛み締むる

転々と病院を変へ春を待つ

木蓮の花びらひとつ濡れてをり

夕さりて谷に響けり時鳥

病室へしづかに届け花の風

春風や石に寄せゆく波の音

「上を向いて歩こう」歌ふ春の夕

しづかに息もらすベッドの春の闇

石箱やポットの音する春の夜

ひだまりや問ふ花の名を紫蘭てふ

春の暮ぼつりと口に「ありがとう」

秋楡

村上正人

森口良樹

萌ゆる草を足元に待つ電車かな

前山の日ごと膨らむ春の雨

初蝶やハンドル越しにひらり消え

― 8 切符隣の席も春帽子

峠来て足下の瀬戸の春霞

今年また石の隙間にすみれ咲く

鳥の巢の梢に高しペダル踏む

一打ちに大き音立て紙風船

春の月疲れた帰路に見え隠れ

花の道人の描く絵を覗きつつ

山頂へつぎつぎに摘む蕨かな

見上ぐれば瓦に生えて春の草

リサイクル終へて春野の回り道

駅降りて蛙の声に囲まるる

雨の夜におせび泣く声卒業子

川面ゆくジョギングの影飛花落花

島の子の夕餉のための浅利堀り

行く春や河原に子も降り見る景色

磨りガラスになほも舞ふ影蝶去りて

春落葉微かに匂ふ石畳

春の夕日ともに見し子の越して行く

つばくろや赤毛のアンを開く午後

観音の由来分からず鳥雲に

たんぽぽや住み慣れし家子は発ちぬ

しきりなる春の落葉の古墳群

山門の開かれてゐる牡丹の芽

子の発ちて出勤の朝初燕

今井淳子

山野ウタ

なつ

今年また花の名覚え俳句せん

蝶生れ上へ下へと忙しなく

山椿御神酒いただく地神祭

日向ぼこ友の話を聞いてをり

紋白蝶行きつ戻りつ芝の上

菜の花や客が一人のバスがゆく

枯れてゆく沈丁の香の漂ひて

軒端より斜めにひらり昼の蝶

子の乗れる電車に来たる初燕

帰り道あまたの土筆子と摘みぬ

日当りの地際に動く蛭蝶

降り立ちて無人の駅の桜かな

海沿ひの公園に聞く初音かな

初雲雀ゆるり旋回青き空

花の下ビンゴゲームで盛り上がり

三人で泉邸に見る桜かな

春風やおろしたてなるベビー靴

蝌蚪の群野に捨てられし桶の中

地面にもあまたの椿日を受けて

幼子は両手を広げ花吹雪

姫あやめ屈み見てゐる庭の隅

触れたれば音のしさうな花満天星

大原良子

前田範子

土肥律子

いく日の時間を留め牡丹咲く

チューリップ背に幼子のポーズ決め

畑へ行く小道の端の露の臺

朝風に揺蕩うてゐる牡丹かな

縁石に並んで座り花見かな

風光る北アルプスの見ゆる畑

ぼうたんの開ききつたる夕べかな

寝転べば重なる花の上に空

二分咲きの桜の下の昼餉かな

白牡丹剪りて匂を確かむる

掌にひとひら花の落ちにけり

初顔も桜に惹かれ加はりぬ

絹衣広ぐるやうに牡丹散る

ひとすぢの流れとなりて花筏

暁の半分の月朧月

ぼうたんの崩れて雨の日となりぬ

風の吹くままに揺蕩ひフリージア

上條忠

桑門わかこ

撫子

主なく馬酔木の花のほろほろと

荒波や棠螺の角が岩を這ひ

日の昇り蓬摘む背の温もりぬ

気がつけばしきりと鳴ける蛙かな

波くぐり岩の間の棠螺見る

映画観て街を歩けば春の風

山の寺満天星の花白きかな

はえ縄籠あふるるほどの蟹入る

山寺に枝垂れて花の揺れてをり

牡丹の蕾ひらくを待つ暮らし

朝のニュース桜蝦漁告げてをり

亡き人と一緒に愛づる桜かな

小流れに水芭蕉浴ふ山の寺

春の風足場囲ひを揺らしをり

苧環の花を揺らして風の吹く

紀英子

民

和田史子

犬と行く春林沿ひの散歩道

霞立ち瀬戸の島々消え始む

一列に新入生のランドセル

里山に一本見ゆる遅桜

美耶

亀甲のしらじら乾き堀は春

清明の刃の如き新芽かな

満開の淡墨桜や棺閉づ

卒業子胸に揃ひのスイートピー

高梨英子

肉を焼き友と語らふ花の夕

散る桜集めて猫の顔を描く

雀の子二羽飛び出しぬ草の蔭

上島康子

四方山の話途切れぬ花の下

霞立ち山の鉄塔浮かびをり

路地に吹く気ままな風よ丁字の香

ランドセル背負うてみせる花の下

夜桜の酔客の居る道を避け

暮れ泥む窓開け放ち春惜しむ

蒲公英の絮仙人掌に捕へられ

いかなごをバケツで買ふと友の言ふ

転げ落ち代田に逃ぐる畦の亀

熊谷ゆり子

みさ子

志路猿

花筏音符のごとく河口へと

夫植ゑし躑躅地球の形して

草木の育つボタ山黄砂降る

AIにその名を問へば花海棠

ペーパーに並べ広がる木の芽の香

春の午後終点ですよと起こされて

寝転べば花の五弁の近きかな

用水の花びらに浴ひ帰りけり

向き合うて分け合ひ食ぶる夏みかん

高嶋絹代

桜湯

やす保

孫連れて真つ赤な椿見上げたる

入学式色とりどりのランドセル

河原静子

青空へ羽ばたいてゆく燕の子

春風の運ぶ花粉を厭ひけり

弥生

風のなか一人佇み桜見る

店先に並ぶ筍足止むる

古川廣子